

ヤコブ・クラインはバロック時代に活躍したオランダ人作曲家で、チェロのための作品を数多く残した。この《2本のチェロのための6つのソナタ》第1番は、バロック的な気品と、二つの低声部が編み上げる緻密なアンサンブルが聴きどころ。

ブラームスの《6つの歌曲》は、内省的だがロマンティシズムを湛えた珠玉のリートに、手練手管の編曲者がアレンジを施し、朗々たるチェロの「歌」として再構築した作品。言葉を排した純粋な旋律が、聴き手の心に染み渡る。同じくブラームスの「チェロ・ソナタ 第1番」は、30代のブラームスが大バッハへの敬愛を込めて書き上げた労作。重厚な低音の魅力がほとばしる第1楽章、メヌエット風の優雅で古風な第2楽章、フーガを駆使した峻厳な終楽章と、チェリストの知性と技術、そして精神性が厳しく問われる傑作である。

ドヴォルザークの《モラヴィア二重唱曲集》（モラヴィアはチェコの東南地域）では、土着のリズムと哀愁が2本のチェロの対話によって描き出される。それに続くオッフエンバックの《2本のチェロのための二重奏曲》第2番では、自身も名チェリストであった「オペレッタ王」が、軽妙なエスプリに富んだ掛け合いで華を添える。

ショスタコーヴィチの《5つの小品》では、厳しい時代を生き抜いた作曲家による、機知と諧謔、そして時に懐かしさを湛えた調べが、二人のチェリストの以心伝心のやり取りによって表現される。